

書 評

古川 敦著

『幸福に生きるために－牧口常三郎が目指したもの』

(第三文明社、2001年)

南 紀 子

1. 本書の特徴と意義

本書は、今や世界に広がり、世界で実践されている創価教育の父であり、また創価学会初代会長でもある牧口常三郎先生が、子どもや民衆が「幸福に生きるために」、いかに戦い、生き抜き、崇高な殉教死を遂げられたかがまとめられ綴られている。教育学と教育思想の社会学を専門とする学者であり、大学で教鞭を取る著者は、教育者としての牧口先生が、児童への愛情がひとときわ深く、非常に細やかで、探求心に溢れ、先見性のある卓越した教育者であること、更に、理不尽な権力とは断固戦い続け、幾度左遷されようとも、いかなる横暴にも絶対に怯んだり、妥協したりすることがなかったことを鋭く伝えている。

牧口先生の不二の弟子であり、後継者である創価学会第二代会長の戸田城聖先生は、恩師の十周年忌を記念し発行した『価値論』の補訂再版の序で「当時の哲学会は全く西洋流の哲学に押されていた。しかもこのようにドイツ哲学に傾倒している世界の哲学界が、先生の学説を理解するためには、先生の没後三十年はかかるであろう」と、述べられている。本書では、牧口先生の「価値論」を中心とする思想哲学の要となる部分が厳選され、「教育革命から宗教革命へ」「精神の闘争」へ挑戦」「創価革命」に生きる」の三章としてまとめられ、それぞれの節の中で、詳しく紹介されている。それをもとに、その時代背景や具体的な例をあげての分かりやすい説明がなされ、現代に通じる意義が考察されている。

創価学会第三代会長に就任されて以来ずっと、池田大作名誉会長の未曾暫廢の執筆、対話、スピーチ等で創価の正義と真実は世界中に知れ渡るようになった。その御陰で、牧口先生の学説は「卑屈にして脆弱な精神土壌」(44頁)である国内よりもむしろ正視眼の国外に於いて理解され、創価教育が世界で実践されて教育効果を上げ、子どもたちの輝く笑顔とともにその社会は明るい希望が見えてくるようになってきた。一方、わが国では年々少子高齢化が進む中で、この行き詰まっている教育をいかに改革するか、また長寿社会が近づきいかに異なる世代が互いに幸福に生きるかの問題は国民のもっとも重要な解決すべ

き課題となった。世界が慕い学ぶ牧口先生を獄死させ五十八年にもなり、「矛盾だらけの転倒した」(182頁)わが国の悪の根を指摘している本書は、牧口先生の学説の先見性に加えて創価の正義をも宣揚している。

2. 創価教育のルーツ：何のための教育か、何を教え、いかに育むのか

著者は、牧口先生が目指した教育改造とは池田名誉会長が2000年9月に提唱された『教育のための社会』を目指す運動であった(12頁)と位置づけている。牧口先生が大情熱で取り組んだ革命的な創価教育のルーツについて考察してみたい。まず、革命を起こさなければならなかった目的とは何か。それは、子どもを幸福にしていくためであり、転倒した教育を正すためである。本来、子どもの幸福のための教育が行われるべきであるのに、国家のため子どもを手段にした子どもを不幸にする教育が行われていたからである。

次に、何を教え、いかに育むのか。牧口先生は、当時顕著であった国家のためのおしつけ的な知識を詰め込もうとする教育を痛烈に批判し、「教育とは知識を与えるのではなく、いかに学ぶかということを教えること」(20頁)と、主張する。そして、子どもの内面にある興味を喚起し、子ども自らが新しい価値を発見し、自分の知恵と力を向上させていくことに、牧口先生の情熱は注がれた。教師は、子どもたちを鑄型にはめる教育を行うのではなく、一人ひとりが個性を生かして自他ともに「幸福な生涯」を送ることができるように心を砕き、献身し、「自分より立派に育てようと尽力」(157頁)していく。これらは、創立者池田先生の御指導と御尽力によって、今日の創価教育の生命線として大切に受け継がれている。

3. 自他どもの幸福が目的の教育哲学・価値論

著者はまえがきで本書が『『価値論』の入門編』と称し、同書の要点を分類しまとめ、要所要所で現代人にわかりやすく説明している。例えば、牧口先生が価値論は「日蓮大聖人の仏法(妙法)への梯子段」(66頁)と述べられている所では、「妙法を素直に信じて行じるための、手引きの役目を果たすもの」(67頁)と説明を添えている。幸福とは何かを追求していく過程で、富貴・財産・名誉・地位などは、幸福の要素にすぎず、幸福とは相続することができず、誰も与えたり、与えられることができないと指摘する。幸福は自分が「主体的に創造する」(24頁)しかなく、教育の目的とは「自分で幸福になれる人間」(24頁)「自他どもの幸福を創造できる人間」(37頁)をつくることと結論する。

牧口先生が目指す教育と人生の究極の目的は、ともに人間の幸福にあると強調される。その視点から幸福とは「価値の追求」(71頁)を意味し、それを探求していく過程で、新

カント派の「真・善・美」を超えた「価値論」と対比していく。牧口先生の主張では、真理とは実在し認識できるが、人間は創造することができないものであり、「評価する主体と評価される対象との間の関係性」(30頁)である価値とは混同せずに区別する。牧口先生の価値の要素は、「美・利・善」であり、「美」は芸術・文化の価値であり、「利」は経済的・合理的・能率的な価値であり、「善」は社会的な価値であり、不正に対する正義の追求で、最も重要な価値と位置づけられ、「利」の要素を取り入れたことが最大の特徴と指摘されている。これらの価値を創造することが幸福につながるのである。

4. 至上最高の絶対的な善と民衆の幸福を目指して

牧口先生が「最晩年になると」美・利・善の価値の「調和」(84頁)を重視するようになり、目的観の遠近大小に応じて、明快に図式化して論じられていくようになる。個人としても自他ともどもに、かつ社会も繁栄をさせていく「大善」を創造するには、妙法を根本にするしかないと確信され、「至上最高の絶対的な善」(92頁)を志向し、広宣流布を堂々と叫び、信念のままに戦い抜かれる。著者は、牧口先生が軍国主義の激しい弾圧の中をまさに「敵前上陸」(88頁)する覚悟で、いかにすさまじい戦いをされたかを驚きと敬意を込め具体的に綴っている。昭和16年5月から軍部政権に逮捕されるまでの2年1カ月の間に、牧口先生は69歳から71歳の高齢であるにもかかわらず、「特高警察の監視下で、なんと240回を超す座談会を開催したのである。座談会は、未入会の人を交えた折伏の座談会であることが多かった。実際、帰依から逮捕されるまでの間に、約500人あまりの人を日蓮大聖人の仏法に導いた、とみずから証言」(116頁)したのである。

『価値論』は弟子の戸田先生が、師匠・牧口先生の「理論と実践のあり方を価値創造的にまとめあげた」(67頁)師弟不二の証明と特筆されている。理論面では、牧口先生は妙法への確信が深まっていくにつれて、当初の学習指導主義にもとづいた「利・善・美」は生活指導主義にもとづいた「美・利・善」へと改められていく経緯が記されている。実践面では、牧口先生は、権威権力の言いなりになっている日本の民衆がどうしたら幸福になることができるかを思考し続け、民衆が賢明になり、自立し、利己主義に陥らず、自他とももの幸福を目指し「社会のなかで善の価値を創造し拡大していく」(179頁)社会変革を行うことと結論した。そして、その実現のためには、著書、実験証明の活動、講演よりも、小人数での学習会、座談会のほうが納得につながり、最終的には一対一の対話から始めていくしかないと感じていられる。

5. 女子教育にも情熱を傾け、女子を幸福へ導いた牧口先生

望むらくは、女性に学問は不要とされていた時代に、牧口先生が1904年（明治37年）8月から1908年（明治41年）8月までの4年間は女子教育にも情熱を傾けたことにも言及してほしいと思う。1904年8月から1907年4月は私立東亜女学校で教鞭を取りながら、向学心はあっても通学できない女子のために、1905年（明治38年）5月から大日本高等女学会の設立に寄与し、1908年（明治41年）8月までで高等女学校レベルの通信教育に尽力している。同会が月に2回発行する『高等女学講義』の地理科の外国地理を担当した。

更に、1907年（明治40年）12月には同会の機関雑誌『大家庭』第3巻第1号には、幹事代表として「本会並に附属女芸教習所の趣旨」を執筆している。この中で、「慈善」の女芸教習所を附属し、学資の無い女子のために、無料で教育の機会を提供したり、講義録を給与することが明言され、経済的に困難な女子への教育の充実、及び女子の自立と幸福に貢献している。これは女子がやむなき「依他的生活」から「独立的生活」に向上する慈善事業を推進した証明である。一貫して牧口先生には、最も困難な状況におかれている人に、救いの手をさし伸ばさずにはいられない慈愛、人間愛が漲っている。

その他、大日本少女会が発行する少女雑誌『日本の少女』（下田歌子会長は「日本一の少女雑誌」と称している）の編集にも加わっている。牧口先生はこれらの女子教育の仕事に集中するため、茗溪会（東京高等師範学校の同窓会）の仕事を退職するほどの熱の入れようであった。

6. おわりに

お茶の水女子大学名誉教授の波多野完治先生は「牧口先生の思想を本格的に研究するためには、博士十人をつくるつもりで取り組む必要がある」（『牧口常三郎』聖教新聞社、524頁）と述べられている。これは牧口先生の思想哲学の深さが尋常ではないことを示唆している。本書は、そういう容易ならざる課題を抱えながらも、工夫をして編集されているため、読みやすい。しかしながら、本書には随所に深遠な仏教哲学用語、たとえば、「文証・理証・現証」（63頁）「三大秘法」（111頁）「一念三千」（152頁）「鬪諍言訟」（167頁）などが出てくるので、こうした用語を巻末に整理して、索引を付けていただけると、一読後再度調べたい場合に助かる。仏教及び妙法の背景知識が少ない場合、牧口先生の思想哲学との関連を再考する場合、役に立つと思われる。

原文の旧かなづかいは現代かなづかいに表記され、創作者池田先生の著書やスピーチを羅針盤とし、深い洞察と明快なる方向性を示し、適宜説明を補っている。この配慮によって、読者は牧口先生の思想哲学と幸福観の理解を深めることにつながるだろう。更に、本

書は読者を惹き込み、人間として、教育者としていかに生きるかを読者に問い、考えさせる威力を持っている。牧口先生の高潔な不撓不屈の人生を辿りながら、善悪を曖昧にしてはいないか、悪を責め悪と闘っているか、どんな学生も優等生にし、幸福に導いているか等のさまざまな問いかけが迫ってくるのである。本書は、広くは教育や人生の目的とは何かを求めている求道の人たち、教育者、とりわけ創価教育に携わり、生徒や学生の「最大の教育環境」となる教師に啓発を与える一書であろう。